近世肥前窯業史－16世紀末～18世紀－

中野　雄二（長崎県波佐見町教育委員会）

1580年代、大陸からの技術導入によって始まった肥前（現：佐賀県・長崎県）窯業は、17世紀前半代の磁器生産の成功で飛躍的な成長を遂げ、17世紀後半代の海外輸出を契機に生産体制の拡充をはかり、18世紀代には国内向け陶磁器の開発・販路の全国的な拡大等によって、生産規模・生産量ともに他産地を大きく引き離すことになった。

発表では、このような16世紀末から18世紀という肥前窯業の勃興期から隆盛期にかけての陶磁器の諸様相について、生産地を中心とした調査・研究成果を基にしながら、年代ごと・藩ごとに分けて概観した。

今回取り扱った陶磁器の器種は、生産量が多い碗・皿を中心とした。年代については、大橋康二氏の近世肥前陶磁編年による時期区分（Ⅰ期：1580～1610年代、Ⅱ－１期：1610～1630年代、Ⅱ２期：1630～1650年代、Ⅲ期：1650～1690年代、Ⅳ期：1690～1780年代）に依拠し、各期ごとに製品様相の特徴をまとめた。同時に、肥前において窯業が盛んであった佐賀藩・大村藩・平戸藩、それぞれの中核的産地（佐賀藩：有田＜佐賀県有田町＞、大村藩：波佐見＜長崎県波佐見町＞、平戸藩：三川内＜長崎県佐世保市＞）の陶磁器を主に取り上げ、藩による製品様相の相違も提示した。

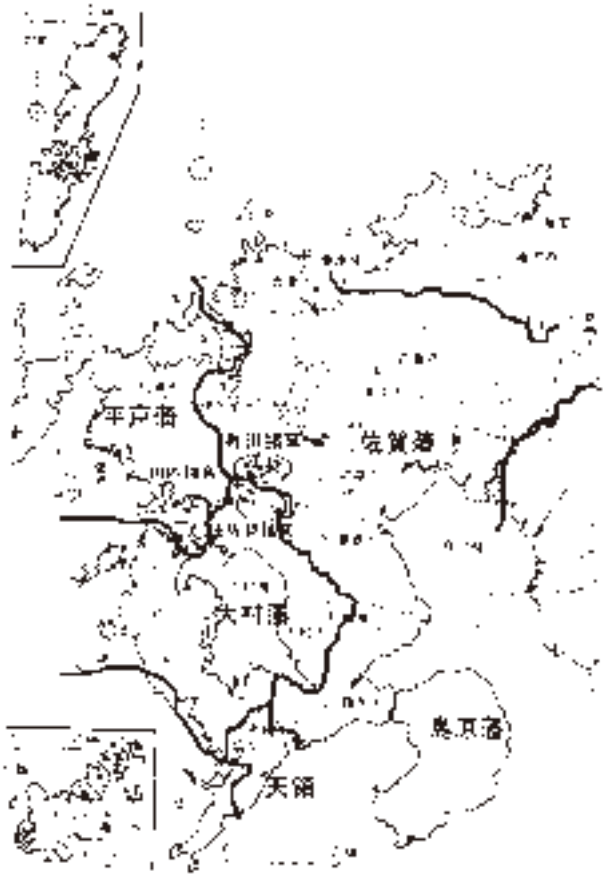
＜Ⅰ期＞陶器生産のみの段階。

＜Ⅱ－１期＞文禄・慶長の役後、朝鮮李朝の様々な窯業技術が到来する段階。佐賀藩有田・大村藩波佐見では磁器生産が開始される。

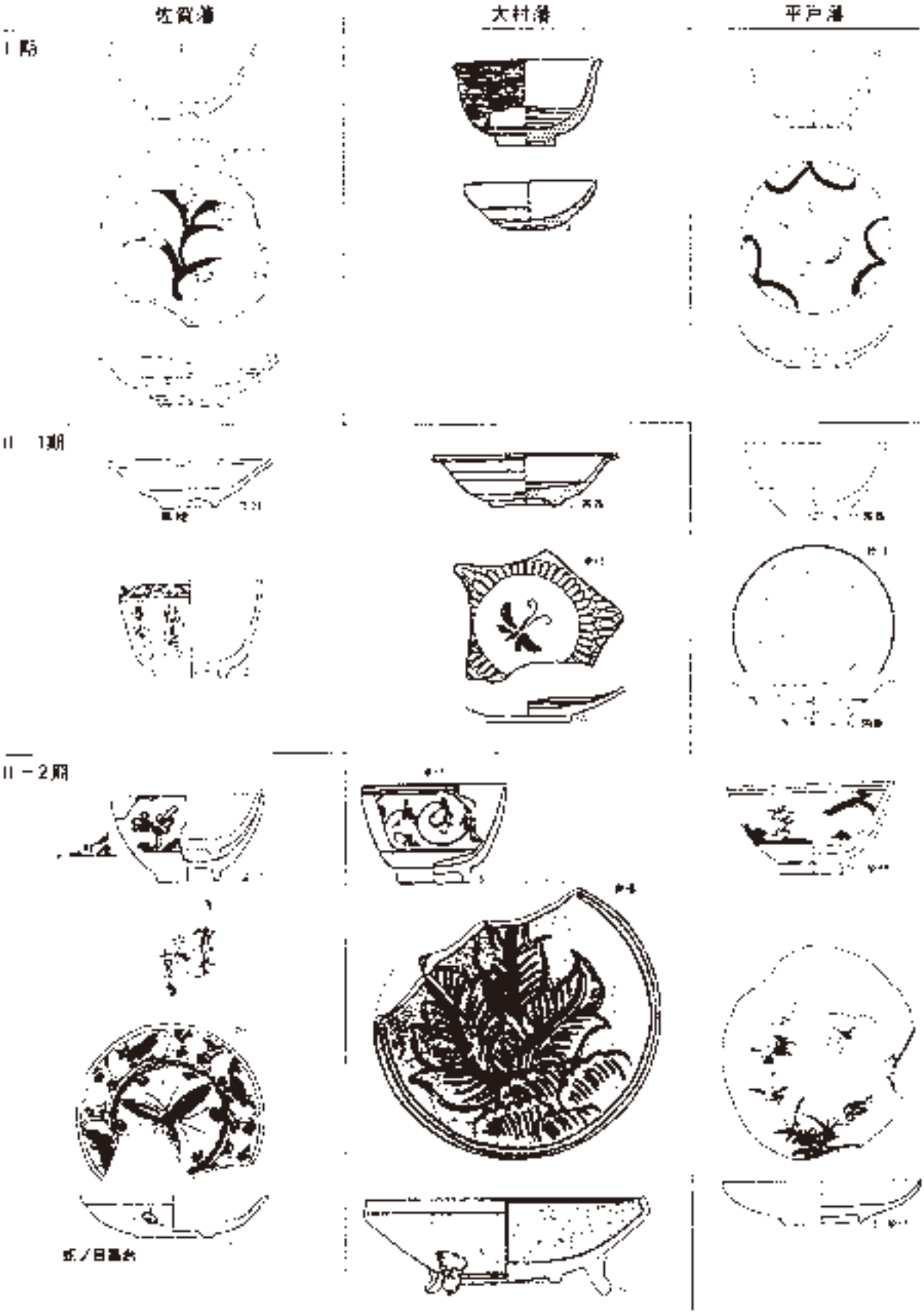
＜Ⅱ－２期＞陶器生産を縮小し、磁器生産を本格化する段階。佐賀藩有田では窯場の整理統合が行われ、磁器生産体制を強化。色絵の生産開始。大村藩波佐見では「三股（みつのまた）青磁」と呼ばれる青磁の優品を生産。平戸藩領内でも磁器生産が始まる。

＜Ⅲ期＞肥前陶磁の海外輸出が盛んに行われた段階。佐賀藩有田では「柿右衛門様式」の色絵製品をはじめとするヨーロッパ向け輸出品を生産。大村藩波佐見・平戸藩三川内では東南アジア向け染付製品を生産。

＜Ⅳ期＞海外輸出を停止し、国内向け磁器製品の生産に転換した段階。佐賀藩有田では主に富裕層向けの上手の磁器製品を生産。大村藩波佐見では一般庶民向けの下手の磁器製品（「くらわんか手」）を大量に生産。平戸藩三川内では上手と下手の磁器製品を生産。



肥前地区旧藩領図、有田・波佐見・三川内諸窯位置図


佐賀藩
大村藩
平戸藩
I 期
II 1期
II－2期

肥前諸窯Ⅰ～Ⅳ期製品図（S＝１／４）

１：唐津市飯胴甕下窯、２：有田町原明窯、３・４：波佐見町下稗木場窯、５・６・11：佐世保市葭の本１号窯、７：有田町小溝中窯、８：有田町小溝上窯、９・10：波佐見町畑ノ原窯、12：佐世保市葭の本２号窯、13：有田町天神山窯、14：有田町外尾山窯、15・31・33：波佐見町三股古窯、16：波佐見町三股青磁窯、17：佐世保市長葉山窯、18：平戸市中野窯、19：有田町長吉谷窯、20：嬉野市吉田２号窯、21：有田町中白川窯、22：波佐見町高尾窯、23：波佐見町辺後ノ谷窯、24：波佐見町咽口窯、25・27・34・35・36：佐世保市江永古窯、26：佐世保市伝代官所跡、28：有田町窯の谷窯、29：有田町広瀬向２号窯、30：伝世品、32：波佐見町百貫西窯